

月刊

いじろのとも

第十二卷

五月号

選択的絆のうそ

お互いが

選択できる

社会こそ

進化と思う

浅はかさ

愛別離苦も

あると知れ

怨憎会苦も

あると知れ

子は親の鏡

子は親の

鏡と知れよ

非行みて

人生を考え直して

みたい人は（八八）

『正法眼蔵』解説（三三二）

前回で、道元の書き残したもので、もっとも難しいと言われています。「有時」の巻を終わりました。今回からその次に難しいもの一つとされています。「仏性」の巻に移りたいと思います。

仏性

釈迦牟尼仏言、一切衆生、悉有仏性。如来常住、無有变易。

これわれらが大師釈尊の獅子吼（ししく）の転法輪（てんぼうりん）なりといへども、一切諸仏・一切祖師の頂（ちようない）眼晴なり。参学してきたこと、すでに二千一百九十年、当日本仁治二年辛丑歳、正嫡わづかに五十代、至先師天童浄和尚、西天二十八代、代代住持しきたり、東地二十三世、世住持しきたる。十方の仏祖、ともに住持せり。世尊道（どう）の一切衆生悉有仏性は、その宗旨いかん。是（ぜ）什麼物（しもぶつ）恁麼来（いん

もらい）（是れ什麼物（なにもの）か恁麼に来る）の道（どう）（転法輪なり。あるいは衆生といひ、有情といひ、群生（ぐんじょう））といひ、群類といふ。悉有の言は、衆生なり、群有也。すなはち悉有は仏性なり、悉有の一悉を衆生といふ。正当（しよとう）（恁麼時は、衆生の内外（ないげ）すなわち仏性の悉有なり。単伝する皮肉骨髓のみにあらず、汝得吾（によとくご）皮肉骨髓（ひにくこつずい）なるがゆゑに。

これまで通り参考までに、玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵2』（大蔵出版刊）の現代語訳を引用させて頂きます。

釈迦牟尼仏が言われた。

「一切衆生悉有仏性、如来常住無有变易」・・・如来は常住にして、变易有ること無し」

これは、われらの大師釈尊の獅子吼（ししく）の説法であり、また、一切の諸仏・諸祖の真骨頂であり、眼の玉である。釈尊以来、代々仏法を継いできた人びとが参学すること、すでに二千一百九十年（日本の仁治二年）（一一二四一）、正法を継いできた人びとはわずかに五十代（先師天童如浄師に至

る。インドでは二十八代、中国では二十三世、また広くは十方三世の仏祖もともに正法を行じてきたのである。

では、世尊のいわれる「一切衆生悉有仏性」とは、どういう宗旨であるうか。これこそ釈尊の究極ぎりぎりの説法である。あるいは、衆生といい、有情といい、群生（ぐんじょう）とも群類（ぐんるい）ともいうが、悉有とは、衆生のことであり、群有のことである。すなわち、悉有は仏性なのである。ありとあらゆる存在の一存在を衆生というのである。

究極ぎりぎりのところをいえば、衆生の内も外も、そのままが仏性でうずまっている。ひとえに伝えてきた仏祖の皮肉骨髄だけではない。「汝すでにわが皮肉骨髄を得た」と達磨大師がいつておられるのであるから、一切の衆生が皮肉骨髄を得ている。

それほどは難しくないように思えます。以下、順次、分かり難いところや参考になる点を解説していきます。まず、道元の説く「仏性」が、よりよく理解できますように、私が考えます、「心のモデル」について、紹介しておきます。

私は、人間の心＝精神には、一方では、自分の命の限りをつくして、自分の生きている意味を見つけ、生き甲

斐を追求していきたいという心（＝自己・精）と、他方では、これとは矛盾的なのですが、他者に関心を向け、他者を愛し、他者と心を通わせたいという心（＝他己・神）の、二つの心をもっている、としています。そして、

この自己と他己という二つの縦割りの心に、五段階の横割りの機能領域（水準）を考えます。それらは、次の五つです。4 自我・人格（たましい）機能領域、3 認知・言語（あたま）機能領域、2 感覚・運動（からだ）機能領域、2 情動・感情（こころ）機能領域、0 生命蔵識・如来蔵識（ずい）機能領域。これらの対で、前者が縦割りの心の自己、後者がその他己に属します。そして、このうち、4・1が意識領域で、0は無意識領域です。この関係を、眼で見て分かり易いように表にしたのが、横書きですが、次頁上段の表1です。なお、この表では、無意識領域は、一番下に書かれています。もし意識の機能領域を円（あるいは四葉のクローバー）に表しますと、無意識領域は、その中心に来ます。ですから、あらゆる上位の意識機能に接していて、その基礎をなしていることになります。

さて、私が考えています「仏性」ですが、それは、私たち人間では、他己の0無意識領域に宿る如来蔵識が、それに当たっています。

表 1 精神の弁証法的二重性と機能

自己の モーメント	他己の モーメント	固有な機能
自我	人格	統合性、目的性、一貫性
認知	言語	知能、知識の創造と蓄積
感覚	運動	技能、外界への適応行動
情動	感情	通心、内界の心的な処理
生命蔵識 (精髓)	如来蔵識 (神髄)	生のエネルギー この世の贈り主

なお、このことは、人間に関してのみ言えることなのです。実は、進化の過程が人間に至ったとき、人間では、矛盾的に自己と他己という「精神」の二重性を持つようになりましたが、人間以前の動物や植物（「生命」）の段階や、さらにはその前段階である「物質」段階では、両者は分化しておらず、一体です。しかし、そこに仏が宿っていると考える点では、人間と同様なのです。ただ、人間の前段階である生命や物質では、人間のように矛盾を自覚できないだけなのです。

繰り返しになりますが、仏によって「贈られてある」と考える点では、両者は同様です。この世のあらゆる存在が、仏の贈り物と言えるのです。

でも、こうは言いません。私たち人間も、普通は、この如来蔵識に宿られている如来（仏）を、自覚することはできません。なぜなら、それが、無意識領域にあるからです。ただ、普段、自己を主張する心と他者を思う心が、常に揺れ動いていて、その矛盾の苦しみを味わうことで、それを感じるのです。でも、なぜそうなるのかを考え詰めていきますと、こうした「心のモデル」に行き着くのです。つまり、心の無意識領域に宿した仏の慈悲心の現れとして他者を思いやる心が働いていると考えられるのです。聖者と言われる人たちは、それを冥想の

中で実感することができた人たちなのです。

さて、仏性を理解するための、私の「心のモデル」については、これぐらいにしまして、道元の本文の解説に移りたいと思います。

まず、現代語訳でもそのままになっています、「師子吼（ししく）」ですが、この師子吼という語は、この言葉が出ています『涅槃経』の『獅子吼菩薩品』から出て来ているようです。そこには「師子吼は決定（けつじょう）の説に名づく」とあるようです。「師子吼は決定的に重要な説法である」というほどの意味でしょうか。なお、これに続く「転法輪」は、以前に解説したと思いますが、釈尊がなされた「説法」という意味です。

次に、解説が要りそうな言葉は「是（ぜ）什麼物（しもぶつ）恁麼来（いんもらい）」です。この「是」は、その前にあります「一切衆生悉有仏性の宗旨」です。それが「什麼物恁麼来」ということです。これは、本文に読み方がついていきますように、「什麼物（なにもの）か恁麼に来る」という意味だとしますと（なお恁麼は「有時」の巻でもたびたび出てきましたように、「このように」と取ります）、「なにものかこのように来る」となります。

もう一度整理して言いますと、「一切衆生悉有仏性」と

は、「なにものかが、このように来る」ということです。

そうなりますと、これは、正に「無意識に宿る如来」のことではないでしょうか。無にあつて判然とは分らない「なにものか」が「かくの如く来る」ということです。

私のモデルで言います、無意識に宿った如来が、まさしく「一切衆生悉有仏性」ということになります。

ただ、前述のように、あらゆるこの世の存在が、仏性をもっている（つまり如来を宿している）のですが、ただ、それを意識できるのは、人間に限られている、ということなのです。

次に解説が要りそうなのは、「すなはち悉有は仏性なり、悉有の一悉を衆生といふ」のようです。この「悉有の一悉」ですが、現代語訳にありますように、「あらゆる存在の一存在を衆生という」ではなく、「あらゆる存在そのものが衆生である」ということだと思います。つまり、一悉は一体といった言い方と同じで、悉有の全体が衆生だということなのです。

最後の「単伝する皮肉骨髓」と「吾皮肉骨髓」ですが、人間では、動物としての皮肉骨髓と、人間としての皮肉骨髓とは違うということです。それを自覚することが、私たちに仏性があるということなのです。

自作詩短歌等選

ゆとりでよくなるか？

ゆとり教育の
教育課程が
実施されるという
どんなにゆとりを
与えてみても
それで
子どもたちの
問題行動は
解決しないぞ
浅はかなことを
考えるな

価値の転換を

競争より協調を
自由より制約を
浪費より節約を
みんなで
大切にしよう

ストレスを克己しよう

やすやすと
傷つくところ
鍛えよう
ストレスに克つ
ところにしよう

クローン人間

医師たちは
不妊夫婦を
対象に
クローン人間
製造の
計画ねって
いるという
ますます物化
すすむ人間

無明の闇の現れ

若者が
無明の闇を
さまよえる
大人と違い
行動に
直ぐに現れ
凶悪犯す

善人と悪人の判断基準

自分に
都合の善い人
善人
都合の悪い人
悪人

衆愚を集める

衆愚を集めて
改善策をねり
真理に
達しようとするとは
なんと
愚かしきことよ
民主主義

遺伝子操作の危険性

遺伝子を
操る危険
気付かぬか
やがて破滅が
訪れてくる

教師の人格を高めよ

適性を
欠きたる教師
排除せよ
教師にもっと
精進させる

子ども放置禁止令

自動車に
子どもを残す
親おおし
日本も処罰
いる世になりぬ

国民の心の荒廃

ストレスが
子どものころ
荒れさすと
思うところが
子ども
荒れさす

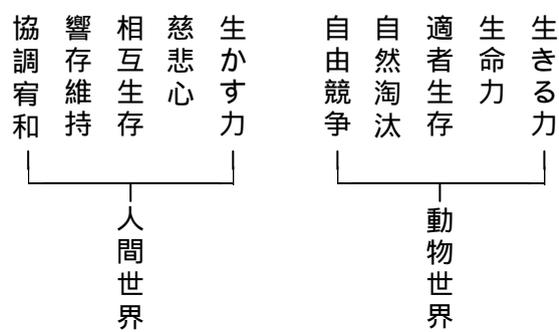
親殺しと子殺し

毎日の
紙面にぎわす
親殺し
子殺し虐待
絶えることなし

自己に閉じるとき

人が
自己に閉じるとき
時間が迫ってくる
せつなになる
人間性を失う

動物と人間の違い



自作随筆選

好き嫌い・損得の判断

産経新聞の生活面に「頼藤和寛の人生応援団」という人生相談の欄がありますが、四月七日（土）付けのそこには、「自分の意見がない」という悩みを訴える、大阪府の三十四歳の女性の相談が取り上げられていました。そして、それへの頼藤和寛氏（神戸女学院大学教授、精神医学）の答えが、「好き嫌い・損得で考えてみる」という見出しで載っていました。

読んで、びっくりしました。と言いますのは、「こんなことをしてはいけない」つまり「そんなことをするようになるから民主主義は必然的に行き詰まるのだ」と、私が、常々言っていることに、この見出しが、該当していたからです。それは、人々の判断基準が、まさに「利益と嗜好」を極大化するということになることなのです。同氏の回答の中心となる部分を引用してみます。

問題は「他人の意見はすべて正しいような気が」することです。これだと周囲に流されるだけになっ
てしまうので危険です。ではどうすればいいのでし

ようか。／まず、好みと利害をしつかり実感できる
ように訓練を積んでください。どんな意見を聞いて
も、それは「好き」か「嫌い」か、自分にとって
「得」か「損」かを見分けるようにするのです。

「あ、その意見、いい感じ」とか「うーん、それっ
て私にすれば損」とか感じるようにしてください。
好き嫌いから始めるのです。／そのうち、フィーリ
ングもいいし、自分の利害にも一致する意見に出会
うことが何度かあるでしょう。すかさず「賛成、賛
成」といつて、それをしつかり記憶するか記録する
かしましょう。／実は、意見に正しいも間違ってい
るもないのです。あなたにとつて「好き」で「得」
な主張こそ、あなた独自の立派な意見なのです。

現在、大多数の人は、こうした「態度」で意見を述べ
ているのだと思います。大学の教授会も同様な態度が大
勢を占めています。

日本は、世界で一番、信仰を失った国になっています。
信仰は、他者性（他己）の根幹です。信仰を失うことは、
判断の全てが、自己中心になるといことです。それが
「損得と好き嫌い」で意見を述べさせることに繋がるの
です。でも、この方の主張とは逆に、この基準は「善悪
や正邪」の基準を無視することになっているのです。

釈尊のつとば（一〇〇）

法句經解説

（三三〇）愚かな者を道伴れとするな。独りで行くほうがよい。孤独で歩め。悪いことをするな。求めるところは少なくあれ。林の中にいる象のよう。

「独りで歩め」という教えは何度か出てきたように思います。これは、釈尊がとても大切にされている教えの一つです。

なぜ、独りで歩むことがそんなに大切なのでしょう。唐突ですが、人間は、自分の欲望を追求し、満足を得たところで、幸せになるわけではありません。たとえ、自分では幸せになったと思っても、自分以外の多くの人を不幸せにしているかも知れないのです。そうなれば、必ずその仕返しや、反動が、自分に帰ってきます。真の幸せは、自分だけではなく、多くの人と共にそうなるのでなければなりません。そのためには、自分だけの欲望の満足を追求してはならない、ということになります。この教えにありますように、独りで歩まなければならぬのは、大多数の人が、他人をかまわず、自分の欲望

を追求して、幸せになりたがっているからなのです。自分ではそんなことはない、と思われるかもしれませんが、そうではありません。ただ、ひたすらに聖人の教えを信じ仰いで、修行している人は別ですが。現代では、そうした人は殆どいないと思います。

となりますと、そのように聖人の教えに則って、修行しながら生きている人は、独り歩むのがよいのです。解脱しない限り、相対な存在である人間は、「あいたいして」しか生きていけません。ということは、欲望を追求する人に「あいたいして」生活していますと、どうしてもその人から欲望追求の影響を受けてしまうのです。独り歩まなければならぬ理由が、そこに存在するのです。次いで、「悪いことをするな」と言っています。相対なものは、自分への執着を捨てることはできませんから、悪いことをしていると自分では自覚しないで、悪を犯してしまうのです。常に、自分の行為を反省してみる必要があります。

次いで、「求めるところは少なくあれ」と言っています。仏教には「少欲知足」という言葉があります。欲が少なく、わずかなもので満足していることを意味しています。私は質素儉約とっていますが、それは、この「小欲知足」のことも含まれます。そまつなもので、満

足する。それが無理なくできることが大切なのです。

(三三一) 事がおこったときに、友だちのあるのは楽しい。(大きかろうとも、小さかろうとも)、どんなことでも満足するのは楽しい。善いことをしておけば、命の終わるときに楽しい。(悪いことをしなかったので)あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

楽しいことが、四つ述べられています。友だちがあること、全てのことに満足すること、善いことをすること、悪いことをしないこと(そのことで受ける報いの苦しみをのがれること)の四つです。

真言密教では、「大楽(たいらく)」を得ることを目的にしていますが、それは、最終的には、本尊と修行者との合一の体験を得ることです。

その体験を得ますと、誰とも善い友(「善知識」となることができますし、全てに満足して何事にも不満がありません。また悪を為さず、善を為すことができます。

では、どうすれば、そうなれるのでしょうか。

真言密教では、修法(しゅほう)とよばれる、極めて体系的な冥想方法が確立しています。それによって、最

終的には自分と仏が一体であると実感できるようになっています。その状態を「入我我入」と呼びます。

しかし、その時の体験を口で言いますと、その体験を得られていない人がそれを聞いて、その報告への執らわれが生じます。

例えば、宙に浮いた感じだと言いますと、「空中浮遊」と称して、それへの執着が生まれます。また、光が見えると言いますと、幻覚で光が見えても、一体体験のように考えます。しかし、そうした偽の体験をした人が言うことは、いちいち間違っているのです。

いま、多くの宗教家が、自らを解脱者として、間違った本を書いていきます。そうした本がちまたにあふれ、情報公害の観を呈しています。宗教をますます喪失させるのに大いに貢献していると言えます。残念なことです。

人間の最も難儀な点は、そうした偽の体験報告者の言葉と、真の体験報告者との区別が、つかないことです。それをよいことに、多くの新興の宗教家が名利を追求しています。なんと嘆かわしいことでしょうか。

釈尊に帰ろう、老子に帰ろう、ソクラテスに帰ろう、キリストに帰ろう、と言いたいと思います。

そうして、ひたすらにこうした人たちを信じ仰いで、修行に励むときだけ、この偈に示されている四つの樂が

得られるのです。

(三三二) 世に母を敬うことは楽しい。また父を敬うことは楽しい。世に修行者を敬うことは楽しい。世にバラモンを敬うことは楽しい。

ここでは、敬うことの楽しさを四つ説いています。敬う対象は、父、母、修行者、バラモン、です。人間は、解脱しないかぎり、誰かと心を通わせ、誰かに依存してない限り、心理的に安定し、真の生き甲斐(「楽」)を感じることはできません。

現代の日本では、このことが忘れられています。それは、大東亜戦争の敗戦によって、宗教を捨てさせられ、これに代わって「自由・民主主義」のみが人々の心理的依存の対象となったことが、直接の原因となっています。この偈では、誰かと心を通わせることの大切さを説いています。その対象の最も重要なものが偈にある父、母、修行者、バラモンということなのです。

前述のように宗教を失った日本では、父や母さえも、わが子に対する愛情を失ってきています。ですから、子の方でも、父や母を敬わなくなってきました。人が父や

母を敬い、心を通わせるのは、親が自分をかけがえのない人間として愛してくれているからなのです。それによって自らの心を安定させ、人間に対する基本的な信頼感をもつことができるようになるのです。

なのに、日本では、毎日のように、親による子殺しや、子の親殺しの報道が絶えません。これは、どれほど、人々の心が荒廃して来たかを示すものです。

そうした、心の荒廃は、何も子殺しや親殺しに現れているだけではありません。その次に出てきます、修行者やバラモン(「最高の僧侶階級」といった宗教者を敬わなくなってきたことにも現れています。

かつて、ペルーで日本大使館がテロの武力によって占拠されましたが、その調停役にあたったのは、キリスト教の神父でした。日本ではとても考えられないことです。

また、先日、ブッシュ大統領の就任式がテレビで放映されましたが、同氏は多くの人の前で、聖書に手を当て、大統領の職務を忠実に遂行することを神に誓っていました。そして、そのことを報告するため、最初に駆けつけたところが教会でした。こんなことも、日本では想像すらできないことです。

どれほど日本人が、人や神仏を敬うことから遠ざかっていることでしょうか。日本の最大の精神的危機です。

後記

一、爽やかな風薫る、五月になりました。新緑が目にし
み、こころ洗われる思いがいたします。

二、このところわが家の周辺では、高速道路の開通に伴
う周辺道路の整備として、新たに付けられた道路の側溝
工事が行われています。今はほこりだらけですが、やが
て完成し舗装されて、便利できれいな道路になることだ
と思います。

三、住んでいる家の一室を、お堂に当てていましたが、
この度、昨年購入しました新たな土地に、独立のお堂を
建てました。本体は安物の木質系プレハブですが、下屋
だけは、立派なものになりました。お参りして下さる方
があれば、と思っっています。そこを使った具体的な活動
は今のところ考えていません。

四、畑には、新たに夏野菜をいろいろ植えました。カボ
チャ、ナス、トマト、などです。また、里芋も植えてい
ます。昨年、二株植えたイチゴが、今年は沢山のランナ
ーを出し増えて、あまりきれいではありませんが、結構、
おいしい実をつけてくれます。無農薬ですので、安心し
て食べられます。

五、タマネギもまもなく収穫期を迎えます。必要に応じ
て、大きいものを選んで取り、食卓にのせています。

六、昨年、『学習障害研究における人間精神学の展開』
という論文を学術図書として文部科学省の出版助成を申
請していましたが、このたび採択の通知があり、風間書房
から今年の年末までには、刊行して頂ける運びとなりま
した。昨年三月卒業しました小川敦君との共著です。出
版されましたら、値段などと共にご案内いたします。

七、道元の『正法眼蔵』の新たな巻として「仏性」を取
り上げました。どれにしようか、といろいろ迷いました
が、結局、これに落ちつきました。理由は、「仏性」が
あるのに、なぜ人間は修行が必要なのかと、道元が多年
に渡って悩んだ問題だし、難しいところもあるからです。

月刊 こころのとも 第十二巻 五月号 (通巻 一三七号)	平成十三年五月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしよ</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を 次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさ と 口座番号 01610 8 38660	

